

再三転職を余儀なくされた。最後に京王帝都電鉄の傍系会社にたどりつき、二十一年勤めて定年退職した。

その間、何れの職場でも私が青春に生涯の職場として選んだ、漁業会社で精魂こめて修得した多くの技能と資料は、ただの一度も利用されることなく、私が五十八年前に持参していた古いトランクの中でいまだに眠り続けている。

私の青春の夢はむざんにも打ち砕かれてしまった、見果てぬ夢であろうか。

星は流れて

鳥取県 仲津 定 義

両親を中学卒業前になくした私は官費で学べる学校の一つとして台湾師範に入学した。自分の将来は誰にも頼らず、自分で切り拓こうと決意したものの渡台旅費に困った。しかしよくしたもので兄嫁が「内緒だよ。」と三十円くれてほっとした。

・石をもて追わるる如く台湾へ流れんとして故郷出で行く

・悲しみは父母なき我を冷たくもひとりで生きよと兄の言えるも

師範卒業後、彰化市公学校に赴任、途中足かけ四年、応召により島内警備に当った。二十年九月除隊、疎開中の妻を迎えて銃弾のあたった住宅で生活した。ところが十月初旬、日本人教師に出勤しないでくれ、学校は中国語で授業することになって日本人は不要と言いはされた。日本人教師はとまどったが、台湾人の中に過激な一部の人が仕返しと稱して暴力沙汰に及びはせぬかと不安をいだいた。事実駐在所員は所在不明になった人もあると聞いた。

昭和二十一年春、ちよつと家をあげた間に衣類や引揚後のためにと貯めた金財産を盗まれてしまった。当時私は運送店に日雇仲仕として使われ、ようやく糊口をしのいでいたが、盗難は大きな痛手となった。

三月中旬のある日、私達は引揚列車に乗った。衣料三点、砂糖は一人三斤等と細かい通達があつたが、誰

も正直にその通りにしているものと信じた。家財道具は接收された。

二歳と三歳の子供を連れていた。列車は、何回も駅でない所で停車した。そのたびに世話役が金を集めに回った。金をつかませぬと運転士が動いてくれないからというのであった。

引揚船は中型の貨物船、米軍のリバティーであり、垂直梯子で船底に詰めこまれた。まるで牛か豚のようで異臭と酷熱は度をこしたものであったが、敗戦国の民であるからには文句を言わずに耐えねばならなかった。

一日二回の粥と野菜のスープ運搬は、班ごとに若い男がしなければならなかった。女、老人、病人、幼児はとても大変な苦しみ、妻もひどい船酔いで三日ぐらいは何一つ食わず、右に左にと揺れころがって吐いていたが、何も吐瀉するものがなくなると、いまにも死にそうないきづかいをくり返した。

気の毒なのは病気の老人、ろくに看病もされず、末期の水もなく、いつのまにか息をひきとって水葬にさ

れた。

田辺港についても伝染病発生で上陸禁止、食事は一日一回になり、金をもった者は船員室に入り、握り飯と交換した。泣きわめく子供等は餓鬼畜生の地獄絵図を見る思いであった。

上陸、新田交換、荷物処理、消毒とおきまりのように多忙な時は過ぎ、いつしか夢にまで見た故郷について。ようやくたどり着いたわが生家は戸がしまり商品一つないさびれ方で目を疑った。兄は応召中で未帰還、兄嫁は女仲仕、留守は遠縁の婆やが切りもりをしていたが、嫁をつれて帰ったことが一番嫌われるものになった。

毎日が針のムシロのように嫌味を言われ、皮肉られ、事ごとに意地悪くされたがじっと耐えねば生きておられなかった。兄嫁はたびたび里帰りして食糧を運んだが何一つわけてはくれなかった。毎日婆やが小麦粉でお焼をやいて子供達のおやつにした。二人の子が指をなめてそばに立って見ていると、しっしつと犬の子でも追っ払うようにした。

五月、兄が帰還、私は恩師のお蔭で田舎の学校勤務、妻は菓子工場に就職、二人の子供は毎夕私達の帰りを外のガラス戸の前で待っていた。どんなに雪の降る時でも着たきり雀の着物で足中をはいたまま。私達の涙は洒れなかったが、そのうち長男が食事を受けつげなくなつた。「食べなくては」と言つても「いらん」と言うのみだったが、数日後、兄嫁に言われて驚き病院に行つて栄養失調と知つた。あと一日おそかつたら枯木のように死ぬところだつたと言われ、あわてて米の飯よ牛肉だ牛乳だ卵だバナナだとさがし回つた。会社の同僚が米や卵をくれた。医師も結局無料で注射を続けてくれたわけで渡る世間に鬼はいないと感謝にあひくれた。

数か月後、兄が私に「部屋代を払え」と言つたが、兄弟だからと思つて無視した。兄は凶太い奴と思つたのか、「出て行け」と追い出しにかかつた。私は養蚕場を借りて引越した。そして幾年か流れ、私は校長職を任命された。その時ばかりは兄も喜んだが、兄も大型店時代の流れにとり残され、人がやわらいでいた。

私も人生とは苦闘を笑つて受けとめねばと思つようになつた。

・敗戦の痕痛痛し丸裸の引揚者なれど同情はうけず引揚者の悲しみは消えないが、星の流れと共に明るく生きたい。

さらば基隆

福岡県 松尾 恵美

船は、岸壁を離れた。白いしぶきを思うぞんぶんはねちらしながら、進んでいく。

サラバ基隆^{キムン}、生まれて育つてきた基隆、私はデッキの上から見る。緑の山に囲まれた港町。懐かしい思い出を、全部胸にたたみこんで、目は、むさぼるようにじつと見つめる。今、私から消え去ろうとしている陸地、山川、海岸、町。そのおもかげを永久に消さじと思ふ。そして見渡す。

昭和二十一年三月二十三日、私達台湾に住んでいた